
ドラゴンクエスト? ~天恵物語~

冬生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？（天恵物語）

【NZコード】

N7878Z

【作者名】

冬生

【あらすじ】

世界樹に女神の果実が実った時、神への道は開かれ永遠の救いを得る。

天使達はその言い伝えを信じて、世界樹に星のオーラ 人間の感謝の結晶 を捧げ続けていました。

ウォルロ村の守護天使となつたりタもまたその一人でしたが……突然起こつた出来事により、彼女の運命は大きく変わつてしまつたのです。

（注）ドラゴンクエストの一次創作です。そして、他サイトとの重複投稿だということをご了承の上でお読みください。

天使の落ちた村

少女が一人、守護天使の像の前で突っ立っていた。銀髪に紫色の瞳が印象的な、なかなかの美少女だ。しかし、その少女の顔は曇っていた。

それも全て、この目の前の天使像のせい……という訳ではないが、この像も顔を曇らせる原因の一につになっていた。

（にしても、全然私に似てないよね……）

初めて石像を見た時も、同じ感想を持ったものだつた。浮かない顔で石像を眺めていると、その時「おい」と誰かに声をかけられた。

この声の主は……村長のドラ息子だと言われている、ニードだ。

「えーと……なんか用ですか？」

「お前だよな。大地震のとき、どさくさに紛れてきたヤツは。守護天使と同じ名前らしいけど……実のところはどうなんだかなあ」

その言葉を聞いて、少女 リタはさすがにムッとした。実際、言われた通りなので何も言い返せないのだが。

「本当に変な奴ですよね。着てる服も変なら、どこから来たのかも言わないし」

「だいたい、旅芸人ってのも本当なのかよ?」

服のセンスで人につべこべ言われたくないし、と内心毒づきながらもリタはやつぱり何も反論しなかった。

(これ以上、この村で騒ぎを起したくないんだから)

よつて、リタはひたすら沈黙を守り耐えて来た。自分の出血を言つても、混乱を招くか馬鹿にされるかの一つに一つ。良いことなんて、決して無い。言いつもりなど、たりが無い。

(それに、わたしは人間じゃないんだから……)

リタは、天使界から（文字通り）落ちてきた天使。

しかも落ちたこの村を護る、守護天使だったのだ。「ニードさんはな……最近リックカがアンタにベッタリだから、つまらなく思つていらっしゃるんだぞ！」

「おいつ、バカなこと言つたな……」

ニードに敬語を使つその男は、結構おつまつてみついた。

（そんななんじやない。リックカは皆に優しいよ）

ニードがリックカに惚れているのは明らかに分かるが、それを今わざわざ言つつもりはない。

そしてそこに、リタの唯一の救世主がやつてきた。

「ちゅうと一人共、うちのリタに何か用なの？！」

「げつ……リッカ！」

リッカは、オレンジ色のバンダナが特徴的な宿屋の娘である。そんな彼女の怒った顔を見て、ニードはたじたじ。二人の関係上が一目で分かる光景だった。

「よ、よおリッカ。別に……こいつにこの村のルールを教えてただけだ。おい、行くぞつ」

リッカの登場に狼狽えたニード達は、そそくさと逃げ去つて行つた。ほつと息をついたリタは、その場を救つてくれたリッカに礼を言った。

「リッカ、ありがとう。お陰で助かっちゃつた」

「ふふ、どういたしまして。でもリタ、あなたももう少し言い返した方がいいわ。ニードも、そんな悪い人じゃないんだけどね……」

そう懸念してリッカは言つたが、リタが首を縦に振ることはなかつた。前述のとおり、この村で騒ぎは起こしたくない。

天使界からウォルロ村に落ちてきたリタは、傷だらけだった。

今はリツカの介抱のお陰でやつと元気になつて、今では走り回れるほどなのだが。

「さあリタ、早く家に入りましょう? まだ傷が治つたばかりなんだから安静にしてなきゃ」

「リツカ……私、傷はもう大丈夫だよ!」

「天使は人間より傷の治りが早い。よつて、落ちた際の傷はすっかり癒えてしまつたのだが……。」

「駄目よ、それに昨日風邪を引いて治つたばかりでしょ! 今日もしつかり休まなきゃダメよ! ! !」

「リツカ~」

リツカはリタの手を引っ張り、自分の家へと強制連行した。

(本当に大丈夫なんだけどなー……)

リツカは基本的に優しいが、病人に対してはかなり手厳しかつた。リツカの家で療養して早一週間。リタは、まだ一度もこのウォル口

村から出ぬ」とが出来ずについた。

(天使界の皆は元気かな……)

目覚めてから、ずっと心配していたこと。

念願の女神の果実が宿つたと言つたのに……自分は地上に落とされ、果実はそこかしこにばらまかれてしまった。

(長老様、イザヤールお師匠……)

長老・オムイと師匠であるイザヤールの顔を思い浮かべる。

(……私は、大丈夫。とにかく今は何をすべきか考えないと)

決意を秘め、リタは今夜、ウォル口村からの脱出を試みることにした。

(とりあえず、何かお礼に残していかないといくらなんでも失礼だよね……。つてわたし、一文無しじゃん!!)

そして、そこには意外な展開が待つていたのだ。

夜もすがら。

窓枠に手を掛け、よじ登る。リタは宛がわれた一階の部屋から脱出を試みた。

「い、意外と高いかも……」

たかが一階、されど一階。自分の身長の三倍はあるのではないかと
いう高さだ。

しかし、「」で引き返すことは出来ない。

（「めんねリッカ……」）

恩人に黙つて抜け出してしまうことになつてしまつた。

（お礼も何も言わないまま出ていくなんて……不良だ。いや、一応
置き手紙は置いてきたけれど……）

天罰を受けるかもしれない。

天罰と言えば、つい最近「一ード」にちょっとした天罰を食らわせたこ

とを黙こぼした。

「すみません、お歸りー。リタは不良になつまや……」

窓枠を蹴るように外へ飛び込んだ。

「うわわっ?ー。」

ズシン。

そんな顔と共にリタは地面に呑めつけられた。

「こつたあーー」

「……お前、何やつてんだ?」

「…………」

村長の息子、一ノ瀬だつた。

「一ノ瀬さん、何を?」

「いや、ちょっとな…… そうだ、一度良い。お前ちよつといつち来いよ」

「一ードは建物の影に来るよ」と手招きをした。

とりあえず、脱走がバレるわけにもいかないので大人しく建物の影に隠れた。

「なんですか？」……聞いておきまえけど私は、ちゃんと旅芸人です」

「違えよ、その話じやねえ

「あれ、そうなの？ じゃあ服のセンス？ これは着用の義務があるから着ていいるだけで、私は別に……」

「こ、声大きいよー！ ドさん！」

今はまだ明け方。リツカだけでなく皆が寝ている。はつとして口を押されたニードだったが、気を取り直してリタに話を持ち掛けた。

「峠の土砂崩れを何とかしたい？」

体の至るところにひびいていた葉っぱを払いながら、ニードに向かって呟つた。

ニード曰く、その東の道にある土砂崩れを退かして親父に一泡吹かせたいのだとが。

「リタ、認められたいんだからな。一泡吹かせたい訳じゃねえから

「どうでも同じなんじゃない？」

「……まあな。だけど今、外は魔物がうようよしている。そこでだりタ、旅芸人ってのは結構腕が立つんだろ？だから俺と一緒に来んねーかな？」

ニードの提案に、しばらく考え込んだ。

リツカの家からの脱走計画は、ニードに見つかった時点でのぼり敗に終わっている。

だったら別に頼まれても良いかな、と思つわけで。

「しようがないな……その話、乗つたー」

「わづかー なら早速、」

「でもちよつと待つて、今は魔物の活動が活発になるじよだよね」

早朝は、上サを求めて動き回る時間帯だ。それに魔物は空腹な為、
気性が荒くなっている可能性もある。

「わざわざそんな時に行かなくていいんだじゃ……。まあ上サにな
りたいっていうなら別だけど」

「俺にそんな自殺願望は無い」

「じじゃあ、日が昇った田中に行へー」としてしまつ。…………
「ふー
しょ」

「何やつてんだ?」

一ードが怪訝な顔をする。それにリタは笑顔でもつて答えた。

「私窓から出でてきたから……」「をよじ登らなこと帰れないんですね

」

玄関から堂々と帰つたら、家出しそうとしたのがバレる上、怒られてしまふだろ？。もちろん、リックに。

開いた窓を示すと、ニードの顔がア然とした顔に変化した。しかもリタは見たところピンピンしているし、無傷だ。かすり傷さえ見当たらない。

「お前……本当に人間か？」

「いいえ、守護天使です……とは、さすがに言えなかつたけれど。

「準備は良いか？」

「当たり前！」

「……じゃあ行くか」

ニードが「こいつ、だんだん敬語を使わなくなつてきたな……」と内心思いながらも村を出ようとした時だつた。

「あれ？ 一人とも、どつか行くの？」

やけに幼い男の子の声が一人を引き留めた。

そこにいたのは、まだまだあどけない村の少年。……一ノードに軽い天罰を願つたあの少年である。

「うん、ちょっとあそこまでね」

リタが東の方角を指差すと、その小さな男の子は「あっ」と声を上げた。

「そりいえば僕、あっちの方に何か光るモノが落ちてくの見たんだ」

「光？」

流れ星か何かだろうか。最初はそう考えたりタだつたが、男の子の次の言葉によつてどうやら違うらしいことが分かつた。

「地震の時に落つこちてたんだ。でも誰に言つても信じてくれないんだよな。ねえ、兄ちゃん達で見てこれない？」

これに対する一人の反応は、正反対だった。

「はあ？ お前それ、流れ星とでも見間違えたんじゃ……」

「分かった、任せといて……」

「…………マジかよ、お前」

大きく胸を張るリタに、げんなりとした顔を向ける一一。

「お前…………簡単に安請け合ひいすんなよ…………」

「だつて気にならない？ もしかしたら…………」

地震と同時といつことば、天使界から落ちてきたモノかもしれない
…………そう言いかけ、慌てて口をつぐんだ。

（あ、危ない……）

うつかり口を滑りせると「うだつた。

「もしかしたら…………何だよ？」

ニードと男の子は、いきなり黙り込んだリタを見て首を傾げた。

「も、もしかしたら……流れ星が落ちたのかもしないでしょ！
なんちやつてあはは～」

その場は何とか適当にじこまかしたが、リタが意氣込むのには理由があつた。

（天使界に、帰れるかもしない……）

帰れなくとも、天使界の誰かと遭遇する可能性は高い。

「よーし、行こー！ニードさん！ 出発だあーーー！」

「なんでそんなんに張り切つてんだよ、お前……」

この話を持ち掛けた本人よりも張り切りながら、リタは東の峠への道を進んだ。

「やついやお前、リックには何て言つてきたんだよ」

昨日まで、過保護と言つても過言ではないくらいリタの世話を焼いていたリックを見ていたニードは、外出許可が出たことに疑問を持

つていた。

だから、そのワケを聞いてみたのだが……

「うふ、最初は渋つてたんだけどね……。なかなか引き下がつても
らえなかつたから、『ニードとドームだよ』って言つたら何も言わ
なくなつちゃつたんだよね」

もちろん、ニードのリッカへの好意を知つた上での発言であった。

「……勘弁してくれよ」

「あせは、昨日の仕返しだよ」

「やつぱつ昨日の出来事を根に持つていてんじゃねーかよー」

実は、そのことについてはあまり怒つてはいないのだが、手つ取り
早く外出するひまつするものが一番だと思つたのだ。

「うーん、それにしても結構森ばかりなんだねー」

「田舎なめんなよ。セントショタイン城へなんか、今じゃ峠の道を
使わなきや行き来出来ないんだからなーー！」

それ、偉そうに語るのもでせな……やつ悪のせリタだけだろうか。

「じゃあ、尚更あの土砂崩れをどうにかしないと」

「やうなんだよ、何とかしねえと……つて」

「一ノアの動きがピタリと止まつた。

「リタ、早速魔物だ」

「魔物つて、あれ……」

モーモンだった。

「なに、あれを倒せつてやうの?」

指差すリタの手は少しつぶれていた。

「あんな可愛いの」「……」

見た目も動きもふわふわしてこのモーモンを倒すのは、ある意味難しかった。

「いや可憐にって、お母……」

「へへおおひへ」

「向引き寄せたんだよ?」。ハイハイで来たし……。」

モーモンは、ふよふよと飛びながらコタの元へやつて来た。

「ほらー、全然大丈夫じゃん」

「な、なんだ……。つたく驚かせるなよな」

モーモンを撫でるコタを見て安心したからか、若干及び腰な一ードがモーモンへ一歩近付いた……次の瞬間。

『シャーリー』

モーモンは、ニードに威嚇した。

「うわー……」

「……やつぱ、あんまり大丈夫でもないみたいだね」

リタには大人しいが、ニードには狂暴なモーモンだった。

「なんだよ、こいつ！ 見た目可愛くても性格は最悪じゃねえか！」

『シャーリー。』

またもやモーモンはニードに威嚇した。

「こいつ、俺の言つてること分かんのか？！ つーか、威嚇してる時のこいつの顔マジで恐え！…」

牙剥き出しのモーモンは元の造りが可愛いだけあつてか、恐さ百倍だった。

「言つてゐることは分からなくとも、自分の悪口を言わわれているのくらいは分かるんじゃないかなあ……」

憶測に過ぎないけれど。

その後も、遭遇したモーアモン達はなぜかニードを威嚇し続けたのだとか。

「よつやく、着いたな……！」

やつと峠へ到着した。と言つてもリタはパンパンしていたのだが……

「ニードさん、大丈夫……？」

「お前は大丈夫そうに見えるが、これが？　くそ……モーアモンなんて大つ嫌いだ……！」

（主に）モーアモンから威嚇といつ名の襲撃を喰らつたニードは、すでに疲労困憊な状態だった。

（それにしても……）

田の前に広がる一筋の道。

ちょうど真ん中に、天の箱舟を見つけた。

(箱舟……男の子が言つてた“大きな光るモノ”って箱舟のことかな)

中に誰かいたりするだろ? つか……。

(でも何の気配もしないんだよなー)

でもなー、と考え込んでいたその時。

「、…………おい、リタ!」

「えつ…………あ、はい?…！」

深く考えていたせいで、ニードの呼び声が聞こえていなかつたらしい。

「何ボケーッとしてんだよ。木が倒れてるだけだろ、そんなに面白いか?」「

「……え？」

そう言われて、ハツとした。

(そつか、人間には見えないんだつた)

天使である自分は、人間にも見えないモノも見える。これからは、そういうことも隠していかないとなのかと思うと、少し気が重くなつた。

「そ、そうですね！ 面白いかも…… あはは…… 多分。ニードさん、先行つていいですよ？」

少し拳動不審になつたが、幸いニードはそれに気付かず、「変なヤツだな」と呟きながらも土砂崩れ現場へと向かつた。

「……さて、中には誰かいるのかな？」

天の箱舟は運転席らしき部分しか無かつた。他の車両はバラバラに飛ばされてしまつたらしい。

試しに入り口らしき扉をノックした。

π → π → ...

「返事がない……」

ただの屍のようだ、と続けたいところだが、あいにくリタにそんな余裕は無かつた。

「ええっ、それは困る！ お願い誰かいて失礼しまーす！！」

扉に手を掛け、グッと力を入れる。

だか

「…………つ！ あ、開かない？！」

これは結構ショックだつた。

「何さ！ 天の箱舟が盗まれるなんて、そんなこと天文学的数値並に稀なんだから、ここまでセキュリティ万全にする必要無いじゃん

! !

やつこの問題では無い。

「……しようがない、他の方法を探すしか無いかな」

がつくり肩を落とし、遙か上空の天使界を仰いだ。

そんなリタを影から見つめる存在がいるとは気付かずには……。

「ニードさん！ 土砂崩れの方、どう……ですか？」

崩れ具合を尋ねかけたリタは、それを見て「とてつと苦難を詰まりました。

そこには、巨大な壁のよう立派な木や岩や土。

「土砂崩れって、これかよ？ 正直ナメてたぜ……。こんなのが、どうにもなんねーじゃんか！」

ニードは思わず土砂崩れに八つ当たりをした。ガラリ、と瓦礫が転がり落ちる。

すると同時に、向こう側から声が聞こえてきた。

「おーーー、誰かそこいるのかーーー？ いるなら返事してくれーーー！」

若い男の声だ。

もしかしたら……

（助けに来てくれた人かも知れない！）

「おーーい、二ー二にいるぞお！ ウォル口村のイケメン、二ー二様
はここだぞーつー！」

……イケメン？ しかも、自分で言ひかけうのか。

しかしリタは、二ー二の言葉を敢えて聞き流すこととした。
それは兵士も同じらしい。

「やはりウォル口村の者か！ 私達はセントシュタイン城に仕える
兵士だ。王様の命令で、土砂の撤去を命じられてやってきたのだ」

二ー二は肩を竦め、兵士には聞こえないくらいの声でぼやいた。

「なーんだ、俺達が頑張らなくても大丈夫みたいだな。これを持ち
帰るだけで俺は村の英雄みたいな？」

「そんな世の中甘くないよ、ニードさん」

そんなリタの忠告をニードは黙殺した。引き続き、土砂の向こうから兵士の声が聞こえてきた。

「ニードと言ったが、このことをウォル口村に伝えてはくれまいから？」

「分かった、確かに伝えておくよ……。」

胸を張つて答え、有頂天のニードは足早にその場を離れようとしていた。

「それから、もう一つ確認したいことがある。地震の後、ウォル口村へ向かったルイーダという貴婦人を知らないか。村へ行く途中にあるキサゴナ遺跡へ向かったまま消息が知れないのだ」

「キサゴナ遺跡……？」

「そういえば、ここへ来る途中に“キサゴナ遺跡”と書かれた看板があつたような気がする。」

その遺跡に一人の女の人が単身で乗り込んで行つたらしい。

「キサゴナ遺跡つて……魔物が出て危ないとこりじゃねえか」

「うほやく」二ードだつたが、結局はその頼みも了承した。

「よし、こいつなつたら長居は無用だ。急いで村に戻るぞー。」

言つたが早いか、二ードは物凄い勢いで歩き始めた。

「ちよ……」「二ードさん、速いよー 速いですってばあーーー。」

しかし、この後二ードは飛ばし過ぎたお陰で早くもスタミナ切れになつてしまつたのだった。

リタと二ードの二人は、ウォル口村に帰ると事の次第を村長に知らせた。

そこにはなぜか……

「リック！ なんでここにいんだ？！」

そう、リッカがいたわけだ。

「なんでつて……あんたがリタを連れ出したりするからでしょうー。しかも、『デートだとか何とかー』

「それは誤解だリッカ！！」

「「」「」めんリッカ。実は『デートとかじゃなかつたりして……』

「あら、やうなの？ 心配しちやつたじやない。リタに悪い虫でも付いたらいけないもの」

「…………うん、ありがと」

申し訳なさ八割、二一〇ドへの同情その他諸々一割で、なんだか複雑な心境なリタだった。

(二一〇さん、報われる日がきつと来ますよ……多分)

確信は全然持てないのだが。

「最近は魔物が多いから村の外に出るなどあれば言つたではないか、馬鹿者が！」

「村長……つまり二ードの父親の大声が室内に響いた。二ードも負けじと言い返す。

「でも、俺とリタが行かなかつたら土砂崩れのことが分からなかつただろ？」

「別に知らなかつたところで、道が繋がればおのずと分かつたことだ！」

「痛いところを突かれた二ードは黙る他なかつた。

その様子を眺めてから、リタはリックの方をそろりと向いた。

「リック、ホントに『めんね……？』

「ううん、もういいよ。ケガもないみたいだし。それにしても、ルイーダさんつて……その話、本当なの？ わたし、その人知つてるかもしれない。確か、お父さんの知り合いにそんな名前の人人がいたの。もしかしてルイーダさん、お父さんが亡くなつたの知らなくて会いに来たんじゃ……？」

その可能性は十分にあつた。

「そつか、知らないままウォル口村……どこつかキサゴナ遺跡に向かつてゐるのも……」

「えつ、キサゴナ遺跡に……？」

（ニードへの）村長の説教をBGMに、リタとリックはルイーダの消息についての憶測を展開していた。

「お前ら、そんな」とよつ助けてくれよ……。」

ニードの切実な願いが聞こえてきたのは、そんな時だつた。

「……あ、」

「リタお前……“あ、”じゃねえだらがつ……」

「ニード、話は最後まで聞け！……」

「」のやり取りのせいで一ードの説教時間が長引いてしまったのは自業自得というか、なんというか……。

時は経り、翌朝。

「……リッカ、わたしキサゴナ遺跡に行つてくる」

朝食を食べ終わると、リタはテーブルの向かいにいるリッカにそう告げた。

「ダメよ、危ないでしょ！ それに病み上がりなんだから……」

案の定、リッカは反対した。

しかしリタも引かない。

「ちゃんと隣にも行けたんだから大丈夫だよ！ それにリッカ、ルイーダさんのこと気になるんでしょ？」

ルイーダは依然としてウォルロ村に訪れていなかつた。リッカは、父の知り合いかもしないその女性のことを、ずっと気にしていたのだった。

「なんじや。昨日からずっとボーッとしてると思つたら……そういう

「う」とだつたのか

横から口を開いたのは、リッカと共に暮らすリッカの祖父だ。

チャンス、とばかりにリタは置み掛ける。

「そうなんだよ、おじこさん！ ルイーダさんのことが心配だし…
…お願い！！ いいでしょ？」

根負けしたリッカは、ふう……と溜息をついた。

「……分かった。でも、無理はしないでね」

「ありがとウ……じゃあ早速準備して行つてくるー。」

喜々としてリッカにお礼を言つた後、食器を片付けて足早に外へ出た。

「あ……そうだ、二ーデさんも誘つた方がいいのかな？」

あの村長の息子は、リッカの為なら何でもやりますだ。

(一応、様子を見に行こうかな)

そう思い、村長の家の前までやつて来たのだが。

「怒鳴り声が聞こえる……」

何を言つてゐるのかはサッパリだが、とにかく村長の怒鳴り声がやたらと聞こえてきた。

「もしかして、まだ昨日のことを怒られたりとか……いや、まさかね~」

だが、そのまさかだつたりする。

「……今日は一人で行こうと」

早々にコードを誘つことを諦めたリタは、キサゴナ遺跡へと足を進めるのだった。

「……が、キサゴナ遺跡……」

とても古い建物だった。

こんなところに、人なんてくるのだろうか……。

しかし、件のルイーダはここに寄つたらしいのだから、中に入つて確かめなければならなかつた。

（……やつぱ、一ードさん連れて来れば良かつたかも）

今更に後悔の念が湧いて來た。

だが、ここでウォル口村へ戻るのは遠慮したい。

（もしかしたらルイーダさんがいるかもしれないのに、こんなところで引き返すせない……！）

そういうわけで、村に戻るつもりはさうもないリタなのであつた。

遺跡は、六角形の部屋を繋げ合わせた構造だつた。

さすが遺跡と言うだけあつて建物の中は辺りが暗く、あらゆるところが老朽化している。

人がいるのかどうかも疑わしい。

リタは暗いせいで物に足を取られたり、床が崩れかけたりと、この中に入つてから口クなことが無かつた。

「ルイーダさん、本当にこんなところに寄ったのかな……」

大分、奥地へと入り込んだのではなかろうか。

「やっぱ、いないかなあ」

諦めかけたその時。

「誰かそこにいるのかしら？」

女の人の、声がした。

「あらビックリ！ こんなところで人に会つなんて珍しいこともあ
るのね」

「もしかして……ルイーダさん？…」

「どうして私の名前を……」

薄暗い闇の中、声のする方へと駆け寄ると瓦礫に足を取られた女の
人を見つけた。

「大丈夫ですか？！」

「大丈夫！ と言いたいところだけど……残念ながらあまり大丈夫と言えないわ。ねえあなた、そこの瓦礫を退けて下さらない？」

「あ、はいっ！…」

ケガは大したことないんだけど足を挟まれちゃって動けないのよねー、とぼやくるルイーダ。急いで瓦礫の山を崩そうと奮闘し始めたリタだつたが……

どこからともなく、地響きが鳴りはじめた。

「何、この音……」

「ヤツよ、ヤツが来たわ……！」

“ヤツ”という言葉に首を傾げたリタだが、ルイーダの視線の先を見て硬直した。

「アイツから逃げようとして落ちてきた瓦礫に挟まれたの。頭上にも気をつけてちょうだい！」

やたらと大きいシルエットが浮かんでいる。それはだんだんと自分達の方に近付きつつあり、数メートルの距離になつた時、その全貌を明かした。

その正体は、鋭く大きい角が特徴的な全身毛むくじらの怪物・ブルドーガ。

「い、猪つ？！」

角が生えているけれども。
見た感じは猪のようだった。

（早くルイーダさんの瓦礫を退けないと……－－－）

焦っているからか……なかなか作業は、はかどらない。

「あなた、私のことはもう良いわ、早く逃げなさい……」

「いやです――！　逃げる時は一緒に逃げます！――」

怪物は、一步また一步とリタ達に近付きつつあった。

これではもう、一人揃つて逃げられそうもない。

そう判断したリタは、ルイーダと怪物・ブルドーガの間に立ちはだかつた。

「何を……！」

目を見張るルイーダ。

「駄目よー、はやく、あなただけでも……！」

「！」を出る時は、ルイーダさんも一緒にすーーー！」

リタの右手には、剣が握られていた。

それは、リッカの家の物置から出てきた剣だった。
処分に困っていたらしいので、くれないかと言つたといひアッサリ
とOKを貰つたものだ。

『でも……とても古い剣だから、使えるか分からぬよ？』

ウォル口村近辺に出没する小物モンスターには、おあつらえなのだ
が……リック家の言つ通り、とても古い剣なので、こんな巨大モンス
ターに通用するのかが分からなかつた。

（わたし、とても無謀なことしてゐるよつた気が……）

自覚はある。

それに、リタはもともと剣の使い手ではないのだ。

「でも、負ける訳にはいかない！……」

鞄を投げ捨て、ブルドーガへと立ち向かつた。

相手が突進してくるのを避けつつ、後ろ脚に切り付ける。剣が古い
だけあって、つけることの出来た傷は浅かつた。

「やつぱり……」

「こゝは、四肢を狙つて動きを封じるしかない。

次は前脚に狙いを定め、猛進してくるブルドーガを待ち構えた。

そして一歩踏み出した、その時。

「うわっ……？！」

目の前に瓦礫が降ってきて、思わず立ち止まつた。

しかも、ブルドーガは相変わらず「ひらり」へ向かつて来ている。

（やば……）

来るだらけの墜物に身構え、田舎をつぶると。

衝撃と浮遊感に襲われた。

そしてその直後、背中に壁を感じ、突き飛ばされたことが分かつた。

「うっ……」

あまりにも大きな衝撃にむせそうになる。痛む体を我慢して立ち上がり、目を開いた。結構な距離を飛ばされたらしい。

手元にある剣を、しっかりと握りしめた。

(わたし達は、一人でウォル口村に帰る………！)

そう思つと、力が湧いてくるのを感じた。

「……はああつー！」

後ろ向きのブルドーガへ向かつて突進し、高く跳躍すると一閃した。

同時に、巨体がぐずおれるように倒れた。

「た、倒せた？」

横たわる巨体は、言わずもがなブルドーガのもので。

「良かつたあ……」

一安心したリタは、そのまま意識を手放した。

「ん……あれ？」

まず初めに草の匂いがした。

「…………」

ガバッと身を起しす。田の前にはまだ中にいた遺跡が佇んでいた。

「あひ、やひと起きたのね?」

すぐ隣に、ルイーダがいた。

「ルイーダ、さん……?」

「あの後、ドサクサどうぼく足が抜けたから外に出てきたのよ

つまり、リタを抱えて遺跡を脱出した……と。

そつこいひとりじかった。

「それにしても……あなた、見かけによらず強いのね。おかげで助かつたわ。名前は何といつの?」

「リタです」

「リタ、ね。もしかして……あなたウォルロ村から来たんでしょう。知つてたみたいだけれど、私はルイーダ。セントシュタインで酒場をしているワケアリの女よ」

「酒場……ですか」

酒場……リタには全く縁の無い場所である。

「酒場つて言つても少し特殊な店なんですがね。……さて、わたしはウォルロ村へ向かうことにするわね。あなたはもう少し休んでから来なさい。お礼はあらためて。アーテュー！」

「ええっ、ルイーダさん？！」

引き留める間も無く、ルイーダは颯爽と去つて行つた。

「……行つちやつた

しばらくの間、リタは去つて行く後ろ姿を呆然と見送つたのであつ

た。

リタがウォル口村に着いたのは、日の沈みかけた夕方頃のことだつた。

「わ……すっかり暗くなっちゃつた」

辺りはすっかり暗く、星が瞬き始めている。早く帰らなければ、リツカが心配してしまつ。

まあ……現在進行形で心配しているかもしれないが。

（でも、もしかしたらルイーダさんに話を聞いてるかもしれないし……）

そつであることを祈る。

ウォル口村の門をくぐり、一目散にリツカの家へと向かつた。

すると、家の周りをさ迷う一人の幽靈を発見した。

「あれ……？」

困つたよつてうひつく男性の幽靈。その様子から何かあつたらしい

ことが伺える。

「どうかしたんですか？」

「アラサーアラル...」

声をかけるとその男性は肩を揺らせて驚いた。そして後ろを振り返る。

「ビックリしたなあ。驚かせないで下さいよ……つてあなた、私が見えるんですか！？」

私はとつぐに死んでるんですよ？！」

「ああはい……わたし、この村の守護天使ですからー。」

言い切つてから、自分の格好を思い出した。

天使の象徴である羽と光輪が無い上、不思議な服を着ている自分は天使だと信じてもらえるのだろうか……。

「え？ と…… なんかした事情があつて、今はこんな姿なんだけど

- 1 -

「守護天使様？！」 そうでしたか。どうりで私が見えるわけだ……」

どうやら納得してくれたらしい。普通の人間には幽霊は見えないの
で、それであつさりと理解してくれたみたいだ。

「やつだ、自己紹介がまだでしたな。私はリベルトと申します」

「リベルト……？」

最近、どこかで聞いたことがある気がする。どこで聞いたのだった
か……。

（……思い出したつー）

「リックの……お父様?！」

「やい、ちよつと待つたあ——！」

直後、ピンク色の光がリタの後頭部に激突した。「いつたあーい

ピンク色の光の正体は……妖精のような羽を持つ、ビューミーなギャルみたいな格好をしたモノだつた。

「ちよっとお、ボケッとしてないで上手くかわしなさこようー！」

無茶をおっしゃる。

驚いて咄嗟に声が出ないリタをじっと見つめ、そうじてからようやく妖精らしきモノは口を開いた。

「アンタと……あとオッサン、今天使とか言ってたよね？　あたしもそう思つたケド……いまいち確信が持てないのよね。アンタ、ワッカも翼も無いのよ？」

外見を裏切らない喋り方をする、それを見て呆気にとられながらもリタはとりあえず気になつていてることを聞いてみた。

「えつと……妖精？」

妖精は普通、こんなギャルみたいな姿をしているだろ？

「んー、妖精つてゆーか……」

間を置いて、妖精らしきモノはリタ達の前で決めポーズを決めてみせた。

「聞いて驚けつ！ あたしは謎の乙女サンディ、あの天の箱舟の運転士よつ！！」

ちなみに“乙女”と書いて“ギャル”と読むらしい……。

「えええ～～～～～～！」

リタは素直に驚いた。

「天の箱舟つて……あの天の箱舟？！」

「それ以外に何があるってこのの？……」

驚いた、この小さいギャルみたいな子

サンディイが運転していた

とは。

「サンディイが謎なら、箱舟も謎だわ……」

「ちょっとアンタ、失礼な」と言わないでくんない?…」

「あのー……」

自分で謎の乙女って言つたのに……と思つていると、すっかり場の空氣に飲み込まれてしまつていたリベルトが遠慮がちに声をかけた。

「あ、『めんなさい』リベルトさん」

「てゆーかさ……どう見ても人間なのに天の箱舟や魂は見えるつて、あんた一体何者?」

天使だと認めてくれないサンディイに、リタは一生懸命訴えた。

「だから守護天使ですってばあ! 地震が起きた時、天使界から落ちちゃつて気付いたら羽根もわづかも無くなつてたんです、……」

「ふーん、 そうだったんだ。 なーんか信じられないんですケド……
そうだつ」

サンディは何か思い付いたらしく、 リベルトを捕差し、 こいつ提案した。

「それなら、 ここのオッサンを昇天させてみなさいよ。 それが出来て
こそ天使っしょ！ それが出来たら天の箱舟に乗せてあげてもいい
いわ」

「ホント? 」

リタの目が輝くのを見て、 サンディは「ホント、 ホント」と上機嫌に頷いた。

「リベルトさんつ」

この時のリタの顔は、 それはそれは輝いていたのだとか。

『未練……ですか？ そうだ、 宿屋の裏の高台に埋めたものがある
んですが、 それかもしだれません。 掘り出してはくれませんか？』

それが、 リベルトの昇天しない理由らしかった。

「じゃあ、わたしそれ取つてきまーす。」

リタは茂みの中をガサガサとまさぐった。サンディには、頬んで力
ンテラを持つてもらっていた。面倒だと文句を垂れたがこれが無い
と作業がはかどらないことは分かっているらしい。文句を言いつつ
も、ちゃんと手元を照らしてくれていた。

それにもしても、探し物がなんなのかは分からぬが……。

すると、昔に土が掘り起こされているような痕跡を見つけた。そこ
だけは草で覆われていなかつた。

「あ、確か……掘り出すつて言つてたっけ」

試しに、古ぼけた銅の剣を使って掘つてみる。使い方が間違つてい
る、といつサンディの言葉はこの際無視である。すると……

「…………トロフイー？」

なんど、金ぴかのトロフイーが発掘された。
リベルトのところへトロフイーを持つて行くと、リベルトの顔はた
ちまちにぼこりんだ。

「おおっ！ そうです、これこそ魔王のトロフイー！」

トロフイーを見るリベルトは、なんだか懐かしそうだった。

「実はずっと封印していたんですよ、リックのために、セントシュー
タインへの想いを断ち切るために……」

「リベルトさん、宿王って……宿の王様なんですか?...」

「ええ、まあ……そういうことになりますかね」

「すいごですわー。」

リベルトは、リタの称賛の言葉に照れたように頭を搔いた。
金ぴかのトロフイーは、存在を主張するかのようにキラキラと輝い
ている。

(……そうだつ)

「リベルトさん、これ少し借りていいですか?...」

「いいですよ。でも何に使うのですか?」

リタはトロフィーをリベルトに少し貸してもらい、リッカの家へと入ろうとした。

(リッカに見せたらビックリするかな……?)

父親の遺品を見たら喜んでくれるだろ?、そう思い戸を開こうとした、が。

「あれ……人がいない?」

リッカの祖父でさえいなかつた。

(宿の方かなあ……)

ウォル口村に一つしかない宿へ顔を向けると、明かりが灯っているのが見えた。

(今日に限つて皆あっちにいるなんて、どうかしたのかな)

不思議に思いながら宿の戸を開ける。そこにはリッカや祖父の他に、

客であるルイーダの姿があった。

「わたし、セントシュタインには行きませんからー。」

しかも、入ると同時にリッカの声がした。

「どうしたの、リッカ……？」

キョトンとして戸の脇に突っ立っていると、それに気が付いたリッカが出迎えに来てくれた。

「おかえりなさいリタ、遅かつたじゃない！……あら、このトロフイーは？」

戸の陰にあつたトロフイーを明かりに照らすと、ちゃんとトロフイーは輝いて見えた。

「これは……魔王のトロフイー！ しかもお父さんの一 どうして……」

困惑するリッカに、今まで黙っていたリッカの祖父が椅子から立ち上がつた。

「やのことヒツコヒは、ワシから話そい」

「……おじいちゃん」

それから、祖父はリベルトのことについて語った。

リックの父は宿王だったこと、リックは病弱でそのためにウォル口村に越してきたこと。宿王の称号よりもリックが大切だったということ。

「！」の村に来てからも、リベルトの宿への熱意は変わらなかつた……

…

それは、お前もよく分かっているだろ？……？

「お父さん……。わたし、小さい頃から氣になつてたの。お父さんの遠くを見るような視線……。お父さん、セントシコタインの宿のことを忘れられなかつたのね」

しばらく下を向いて考え込んでいたリックだが、やがて決心したように顔を上げ前を向いた。

「何が出来るか分からぬけど……。おじいちゃん、リタ、わたし
……ルイーダさんの申し出を引き受けでみるよー!」

ついにリックカが決心をし、祖父はそれが良いと後押ししてくれた。

『まさかリックカが私の夢を継いでくれるなんて、あの子も大きくな
つたものです。もう思い残すことはありません……』

リベルトの体が淡い光を放ち始めた。

『ああ、どうやらお別れのようですね。ありがとうございます、ウ
オルロ村の守護天使様……』

リベルトは穏やかに笑い、そしてスッと消えて行つた。

(リベルトさん……どうか安らかに眠つて下さい)

次の日、リックカはセントシュタインへと旅立つこととなつた。
数日後……土砂崩れは取り除かれ、峠の道は開通した。

そして、リックカがセントシュタインへと旅立つ日 。

「離れ離れになっちゃうけど……元気でね、おじいちゃんー！」

「都会暮らしさ慣れんだろうが、くれぐれも身体を壊さぬようにな。ルイーダさん、よろしく頼みますぞ」

「はー、お任せ下せー」

ルイーダが頷き、リッカは祖父に笑顔を向けた後、リタを振り返った。

「リタ、あなたにはすいじくお世話になっちゃった。本当にありがとう。お父さんのトロフィーを見つけてきちゃうなんて、不思議な人ね。もしかしてリタ、本当は天使様だつたりして」

「へつ?！」

「……なぐんてね！ もし途中でセントショタインに寄ることがあつたら絶対宿屋にも寄つていってね！」

実は天使というのは真実なのだが……。冗談だつたことに安心しな

がらリタはそれらに笑顔で応じた。

「あ、ありがとうリッカ。その時は喜んで寄らせてもらひー。」

そして、リッカは少し距離を置くニードにも声をかけた。

「この村の宿、ニードが継いでくれるんでしょう？ 勝手な話だけど、わたしあの宿を閉じたくなかったから……ありがとうー。」

「親父が働けつてうるさいからな。俺がやるからには、セントショタインよりビッグな宿にしてやるよー！」

何だかんだ言いながら、ニードも結局はリッカを送り出してくれた。

「それじゃ行つてきますー！ 皆、今までありがとうございましたー。」

そしてリッカ達は、旅立つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7878z/>

ドラゴンクエスト? ~天恵物語~

2011年12月25日12時51分発行